慶應義塾大学ビジネス・スクール

森永乳業株式会社（A）

ヒ素ミルク事件発生

昭和３０年８月２４日の全国紙朝刊は、この年の初夏頃から西日本一帯に発生していた乳幼児の奇病の原因が森永乳業株式会社徳島工場製のドライミルクの中に含まれていたヒ素によるものであることを一斉に報じた。

この年の６月頃から、岡山県を中心に、近畿、中国、四国一円で、発熱、下痢、発しん貧血、腹部膨張などの症状をもつ乳幼児が多数現われ、原因不明の奇病とさわがれていたのであった。この奇病が人工栄養児に集中していることに注目した岡山赤十字病院では、８月１３日頃になって、患者が森永粉ミルクの愛用者に限られていることに気づき、この奇病を「Ｍ貧血」と名づけたりしていた。その後、岡山大学附属病院に入院していた奇病の乳児２人が死亡し、その解剖が８月２０日、２１日の両日に行なわれたが、その結果、この奇病は重金属中毒の疑いが出てきた。そして、さらに調査・分析を進めていた岡山大学医学部小児科学教室（浜本英次教授）が、８月２３日、「中毒の原因は森永粉ミルク中に含まれていたヒ素である」ことを、岡山県衛生部へ届け出たため、翌日の新聞報道となったのであった。この年の３月に発生した、雪印乳業株式会社の粉ミルクによる学童集団食中毒がまだ記憶に新しいうちに起った事故であった。

岡山県衛生部からこの報告を受けた厚生省公衆衛生局では、２４日午後、森永乳業に対して、徳島工場の製品（ＭＦ印）にかぎり販売中止を通達、一般家庭に同工場製品を使用しないように指示を発するとともに、関係各方面に実状調査方を指示した。

新聞、ラジオ、そしてこの頃普及の途についたばかりのテレビも連日この事件をとりあげた。そして実状が明らかになるにつれて判明した被害者の数は、

８月２４日	発病	１００名（うち死亡	３名）
８月２５日	同	４６０名（　同	１１名）
８月２６日	同	1,000名（　同	２３名）
１０月１１日	同	9,926名（　同	６２名）
１２月　９日	同	11,891名（　同	１１３名）

と拡大し、昭和３１年６月９日の厚生省発表では、発病者数１２,１３１名（うち死亡１３０名）にまでのぼった。

このケースは、クラス討議の基礎資料として、慶應義塾大学ビネスス・スクール専任講師小野桂之介が作成したものであり、経営管理上の適切または不適切な処理を例示しようとするものではない。なお、本ケースの作成に際しては、日本コカ・コーラ株式会社の援助を得、慶應義塾大学大学院の大西恭二、奥山雅和、および植村輝樹等も協力した。（１９７３年５月作成）